

論文要旨

経営学研究科
経営学専攻修士課程
人材・組織マネジメントコース
後藤 典子

本論文の目的は、秘書本人を対象にインタビュー調査を実施し、補佐対象である上役から指示されたものや明示的な職務ではなく、秘書自身で判断し実施している諸行動について明らかにすることである。秘書は、管理職や経営層といった上役の業務遂行のために補佐を行うパートナーなどと位置づけられているが、実際上の秘書の地位、職務、あるいは職能は不明確である。また、OA化、IT化により補助的な役割である秘書にも変化が生じ、秘書は上役に忠実で誠実であるだけでなく、主体性を持った存在でなければいけないという主張に変化してきた。しかし、実際に現場の秘書がどのように上役を補佐しているのか、というような先行研究は少なく、本研究を実施するに至った。

本研究では、現在もしくは過去1年以内まで役員秘書に従事していた者10名に対し、インタビュー調査を実施した。分析の結果、以下の発見事実が確認された。(1)「上役が創業者（オーナー）であるか否か」という上役の属性と、1日の仕事の中で「秘書が上役と接する時間の長短」という上役によって規定される環境面の二軸により、秘書は四つに類型化（I型の参謀型、II型の調整型、III型の世話焼き型、およびIV型の献身型）され、この類型ごとに役員秘書の自発的な補佐や行動が異なる。(2) I型の参謀型には、①上役の意図実現の際のリスクを排除する、②部門長や他の役員から上役を守る盾になる、③自らが悪役を演じる、④上役の（行動や意思決定の）誘導、および⑤裏で根回しをする、という行動が見られた。(3) II型の調整型には、①裏で根回しや調整をする、②知識や経験を他者に伝える、という行動が見られた。(4) III型の世話焼き型には、①積極的にお節介をする、②自由にやって良いと言われても確認を取る、という行動が見られた。(5) IV型の献身型には、自発的な補佐や行動についてはあまり見られなかった。しかし、スケジュール管理の中で、①一つのイベント時間に余裕を持たせる、②イベント間の時間を空ける、③体調を考慮してスケジュールを入れる、④大量のスケジュールを小分けにして伝える、といった上役の体調を気遣う自発的な配慮が見られた。

本研究の学術的貢献は、これまでの秘書の研究において成果の蓄積が不十分であった秘書自身を対象とした経験的研究に新たに三つの知見を加えることができたことである。第一に、秘書本人のデータに基づき、上役に対する補佐や役割について明らかにしたこと。第二に、秘書の行動には自律性があることを具体的な行動も含めて示すことができたこと。そして第三に、秘書の自発的行動を、上役や職場環境の二軸、四類型で示し、自発的行動の違いを説明したことである。